



TITLE:

[特別講演]バルザックの生涯における1822年の意義について

AUTHOR(S):

道宗, 照夫

CITATION:

道宗, 照夫. [特別講演]バルザックの生涯における1822年の意義について. 仏文研究 1987, 18: 213-218

ISSUE DATE:

1987-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137721>

RIGHT:

バルザックの生涯における1822年の意義について

道 宗 照 夫

本日お話し申しあげる題は上記のとおりであります。このような題を選んだ理由からまず入ってゆきたいと思います。

今日の世界のフランス文学研究は、どの作家についてもそうでしょうが、総合的把握の到達度はまだ不十分であっても、いずれはそのような総合研究を不可欠にするような価値を内包している細部の研究——その意味で非常に大事な細部研究——は、ずいぶん進展してきていると思います。バルザック研究の場合もちろん例外ではありません。バルザック研究においては、戦後急速に進展しだした研究成果が「フランス文学史誌」(RHLF)ほかの諸雑誌に発表されてきたほか、1960年からは「バルザック年鑑(報)(AB)」が定期的に発行されており、この雑誌は個人作家研究誌としては「スタンダール・クラブ」誌とともに継続している研究誌の一つでありましょう。

さてこういうバルザック(1799～1850)の生涯にとって、ちょうどフランスやヨーロッパの歴史にとって、大そう重要な年としてたとえば1848年という年をあげることができますように、後の生涯にとって非常に重要な節目をなしている年がいくつかみられます。バルザックが諸雑誌に『高利貸』(*L'Usurier*.後に『ゴブセック』となる作品)、『女性研究』、『二つの夢』(*Les Deux Rêves*.後に『カトリヌ・ド・メディティス』の第三部となる作品)とか、『不老長寿の霊薬』や『サラジヌ』、『砂漠の情熱』といった作品や、今日の『人間喜劇』のなかの「私生活場景」の初版が二巻本として初めて発行された1830年も重要な年です(周知のようにこの年は二月に『エルナニ』合戦があり、七月には七月革命がおきた、フランスの政治と文学にとっても大変重要な年であります)。またバルザックが初めて「異国の女」すなわち後のバルザック夫人となる女性ハンスカ夫人から手紙を受取った年であり、『ことづて』、『フィルミアニ夫人』、『示談』(*La Transaction*.後の『シャペール大佐』となる作品)、『三十女』(今日の『三十女』の第三章にあたる部分)、『捨てられた女』、『ざくろ屋敷』、『独身者』(*Les Célibataires*.今日の『トウールの司祭』)といった諸作品が次々と発表された年であり、カストリ侯爵夫人に気に入るために公然と王党派に荷担したり、『ルイ・ランベール』という哲学的な作品が書かれた1832年という年も非常に重要な年であります。

しかしこのような1830年、1832年という重要な節目の前に、もう一つ重要な節目の年と考えられるのが1822年であります。

1822年のバルザックを知るうえでの基礎資料となるものは、現在シャンティイーのロヴァンジュール文庫に保存されています自筆原稿にもとづいてガブリエル・アノトーとジョルジュ・ヴィケールが『バルザックの青春時代』(*Gabriel Hanotaux et Georges Vicaire : La Jeunesse de Balzac, 2^e éd., Ferroud, 1921*)のなかで初めて発表しましたベルニー夫人宛のバルザックの手紙の下書とか、今日「青年時代の小説」(*Les Romans de jeunesse*)のなかに加えられています『ピラーグの跡取り娘』(*L'Héritière de Birague*)をふくむ五作品であります。その後1960年にロジェ・ピエロ(Roger Pierrot)氏の編纂になります『書簡集』第一巻(*Correspondance, t. I.*)に再録されましたので、今日では、1822年のバルザック関係の他の書簡とともに読むことができるようになりましたので、要するに1822年分の全部で46通の手紙と「青年時代の小説」五作品が基本文献ということになろうかと思います。

これらの文献はどれを取りましてもバルザックの発展史を知るうえで大事なものであります。なかで

もとくにバルザックとベルニー夫人との出会いと「青年時代の小説」中の五作品が占めている比重が1822年にとって格別重要事であります。

さて、バルザックとベルニー夫人との関係は、バルザックの生涯について書かれた本には多かれ少なかれ大抵言及されている事柄でありますので、かなりよく知られていることとしますので、今日は1822年に発表された五作品のこと、とりわけバルザックとベルニー夫人との関係の影響がはっきりみられるようになる『アルデーヌの助任司祭』(*Le Vicaire des Ardennes*)という作品により重点をおいて、1822年という年の意義を探ってみたいと思います。

1822年の46通の書簡中、ベルニー夫人に宛てられたものは全部で28通におよんでおり、比率の大きさがわかるのでありますが、一ばん早い日付のは3月23日より以前、一ばん後の日付は10月4日になっています。一方バルザックの「青年時代の小説」の最初の五作品中の第一作にあたる『ピラグの跡取り娘』が発行されますのが1822年1月(ユベール書店)、次いで『ジャン・ルイ』、または『拾われた娘』(*Jean Louis ou La Fille trouvée*)が3月30日(ユベール書店)、第三作目が『クロチルド・ド・リュジニャン、または美貌のユダヤ人』(*Clotilde de Lusignan, ou le beau Juif*)が7月17日付(ユベール書店)となっていますので、ベルニー夫人との関係の影響が出はじめるのはこの『クロチルド』からであろうことが予想されるわけですし、事実そのように思われ、今日「^{ビブリオフィル・ド・ロリジナル}原典愛好者版」(éd. BO.)の最初の頁に「献辞／あなたに……／あなたのいたって従順な／ローヌ。」(*Dédicace./VOUS.../Votre très-humble,/R'HOONE.*)と大きく書かれている、この「あなた」という文字が当時バルザックの心のなかに大きな位置をしめつつあったベルニー夫人であるとされています。しかし第四作の『アルデーヌの助任司祭』では自伝的要素とのかかわりが一そう強まり、主人公のジョゼフ(Joseph)とド・ロザン(de Rosann)侯爵夫人の人間像、侯爵夫人のジョゼフへの感情表現などに、実人生のバルザックとベルニー夫人の関係がいろいろ姿を変えて描かれているとみられるのです。そして「青年時代の小説」の第五作目は『百歳の人、または二人のペランゲルド』(*Le Centenaire, on Ler Deux Béringheld*)というものですが(11月16日付)、第四作目以外の作品のことを後廻しにして、まずこの『アルデーヌの助任司祭』のことからお話します。

この作品の発行にあたっては、まず出版社がそれまでのユベールからポーレ(Pollet)に変わりますが、これは当時のポーレの勢力からしてバルザックの格が少し上り、作家として認められたことを意味しています。

次に重要なのは、この『アルデーヌ』出版の時から筆名がオラース・ド・サン＝トーバン(Horace de Saint-Aubin)に変わることです。これは、ベルニー夫人との関係が深まり、バルザックの独立作家としての意識のより高まった結果の、“新たな” 出発を意味しております。

『アルデーヌの助任司祭』は、死亡した一青年の原稿に作家が加筆、出刊したという形式で、次のような粗筋です。

村に新しく赴任してきたジョゼフ助任司祭を迎えたゴース老司祭は、ジョゼフの顔をみたとき、狂信家が派遣されてきたと思い、ジョゼフには何か秘密があるようだが誰も真相を知らない。だがジョゼフの手記が女中のマルグリットに読まれた結果、彼は、海軍軍人で艦長であったサン＝タンドレ侯爵の息子であり、マルチニック島の自然のなかで育つうちに妹メラニーと愛しあうようになったが、侯爵の艦内で、社会的不平等に不満をもつアルゴウの率いる水夫たちの反乱がおきて、ジョゼフたち兄妹は父と引離され、離れ小島で途方にくれていたところ、沖を通るデンマーク船に助けられ、フランスに帰ることができた。が、やがてジョゼフは、法により兄弟の結婚が禁止されていることを知り、メラニーの絶望のうちにみずから僧籍にはいってしまったとが判明する。一方ロザン侯爵夫人のほうは新任のジョゼフをみて、昔自分が生んだ息子ではないかと思い、生いたちを尋ねるが、その結果やはり別人だと思う。が、夫人は自分の過去を語り、やがてジョゼフを恋してしまう。しかしその後、ジョゼフはやはり彼女とサン＝タンドレ司教との間にできた子で、父とされていた侯爵艦長は実はジョゼフの叔父であり、メラニーもまた実の妹で

ないことがわかる。ところが一方、今やマクサンディと名乗り、銀行家になっているアルゴウがメラニーと結婚することを画策しており、そこへ生存していた元艦長が現れて彼の前歴をあばいたため、アルゴウは侯爵を暗殺し、メラニーの存在も危くなるが、ジョゼフの活躍で助けだされた。二人は愛を貫き、ジョゼフは僧職をかくして結婚するが、その秘密をにぎったアルゴウのために夫婦の関係が危くなりかけたとき、恋を母性愛に昇華させたロザン夫人の奔走で、ジョゼフの還俗許可があり、二人は晴れて夫婦になった。だがこの喜びも束の間、長年の心労に貧弱したメラニーはとうとう死んでゆく。

この小説は近親相姦のテーマと人物設定のうえで、ラシーヌの『フェードル』やシャトーブリアンの『ルネ』に着想を得、『フェードル』における継母の義理の息子への恋を、実母のわが子への恋に変え、『ルネ』における姉の弟への恋を、「兄」の「妹」への恋に変形し、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』のまだ社会を知らぬ主人公たちと熱帯自然の異国情緒的雰囲気や、水夫アルゴウの姿に、ルソーの思想的影響やバイロンの影響などを認めることのできる作品ですが、バルザックのそれ以前の作品とくらべると、書簡体の一種の思想小説であった『ステニー』(Sténie)に次いで、自伝的要素と関係が深い小説となっています。

この作品の登場人物のうち主要な人物はジョゼフ (Joseph)、サン＝タン Dre (Saint-André) 侯爵、アルゴウ (Argow)、ロザン (Rosann) 侯爵夫人、アルドフ・サン＝タン Dre 司教、メラニーの六人ですが、より重要な人物は最初の四人です。

ジョゼフ像については次のように書かれています。「インディアンのような日焼けした顔をつらぬいて、青年の顔全体に、ほとんど死相にも近い、蒼白さがみられた。血の気のうせた彼の唇、沈鬱な態度は、禁欲生活の掟のもっとも厳しい実践をかたっているようであった。前を切断され、大きな巻き毛の肩にたれがっていた黒髪は、彼の顔に何か靈感をうけた様子をあたえ、物をもとおすような何か暗い力にみちた、生气のある黒い目が、なおさらその様子をあたえていた。」そしてまた別の箇所では、ジョゼフの憂愁と悲哀の「外見は、火山をうちに包んでいる氷であった。」とも書かれています。この人物は登場の初めから不気味な波瀾を予想させる書きだしになっているのですが、その憂鬱なルネの人物の外観のもとに、同時に外圧をはねかえすような闘争心をも秘めている点で、青年バルザックの姿をも宿しているとみなすことができます。ジョゼフはある箇所で、「わたしの邪魔をするものはすべて粉碎します。わたしはそれができます。」と断言している少々きついこの言葉は、当時の闘う若き小説家バルザックの意志表示ではなかったかと思うのです。

次にロザン侯爵夫人ですが、この人物は、バルザックが現に自分との間に関係の進行中の夫人を念頭に思いうかべつつ描かれた人物として、その実在感メラニーの比ではなりません。『ロザン夫人は三十八歳であったが、そのすらっとした背丈、いまま魅力のあるその顔、黒い髪と白い顔色を見ると、男はもちろん女でさえも彼女の年令を若く見誤るのであった。いつも、彼女の才知と善良さが彼女の美人であることを忘れさせた。ロザン夫人の顔にはおだやかな表情がやどり、その唇はかすかな笑みをうかべ、目は表情に富んで、やさしい魂、すぐれた魂を語っていたし、ときには多くの苦しみの源である、あの考えの変わりやすさと感情のえもいわれぬ暖かさをふくんでいた。」と記されています。このロザン像を読みますとき、たとえ読者がバルザックの伝記的事実をいっさい知らなくても、きっと作者は誰か実在のモデルを念頭に思いうかべながら書いたにちがいないと感じさせるほどに現実感の高まりがみられ、この作以前の女性像にくらべて、バルザックの筆力の前進を否定できません。ロザン夫人がジョゼフと初めて会ったときの印象がつぎのように書かれています。「熱狂的で、気品のある、おだやかで、深い憂いの印をやどした[ジョゼフの]この顔をみたとき、侯爵夫人は心が動揺するのを感じ、目に嵐の稲妻をみたような感覚をおぼえた。そして、ある同情の力、抑えがたい魅力のために、[……]彼女の全存在をひっくりかえしてしまうこの人物に心をすっかり奪われてしまったのであった。彼女は、どのような考えを集中することもできず、心がぬけのからになってしまったかのようであり、司祭のまわりをさまよい歩き、そして彼女

のよくは知らないこの男がささやくおだやかな慰めの言葉をむさぼり聞いている。」と。

ところでここに記されています「彼女の全存在をひっくりかえしてしまうこの人物」という表現は、当時のベルニー夫人にとって実際にそうであったにせよなかったにせよ、当時およびその後のバルザックにとっては彼もまたベルニー夫人について、「彼の全存在をひっくりかえしてしまうこの人物」といえたほどの人物であったはずでありますので、ロザン夫人像とジョゼフとの関係は、バルザックが自己の実人生におけるベルニー夫人との関係を転位変形し、ロザン夫人の側から青年をみた姿に変えたものともみなしうるものです。

さて次に重要な人物アルゴウについてですが、この人物はこの作品のなかでは脇役なのですが、脇役の方に重要な人物を配するというバルザックの技法にもとづいて設定されている人物で、もと水夫から銀行家になってからは、醜男ではあるが、黒い服を着、厳しい顔、堂々とした肩をし、太った体で、精力的であり、「大きな性格をもち、力を宿し」、「わしは悪魔でなければならないのだから、息をひきとるまで悪魔でいる！」と叫び、「わしのように五百万フランの金と十二人の忠僕をもっている者はどんなことでも望める人だ。」と豪語する人間として描かれています。この思想は、この世における全能者をもって任ずる思想でして、支配のためには犯罪をおそれない、まさにあのヴォートランの思想の体现者でして、バルザックにおけるヴォートランの思想はすでに『サヴォナッティ神父の作品』のなかで表明されて、『クロチルド・ド・リュジニャン』のなかにも引きつがれてきましたから、この1822年にいたってはじめて、近代社会におけるその実践者の姿をとるにいたったということを意味しておりますし、その意味でアルゴウ——マクサンディは「ヴォートランの『最初の化身』のように」（モーリス・バルデーシュの評）あらわれているわけです。

ところでバルザックはその作家的経歴のもっとも早い時期からして、しばしば二人一組の人物を登場させてき、後々までこの傾向をうけついでいる作家ですが、この『アルデーヌの助任司祭』のなかに次のような記述がなされています。

「彼（アルゴウ）は協力者らしい一人の男をつれてやってきたが、この男は彼への敬意ぶり、より質素な服装からして、太った銀行家と同列ではなく、前者の人物の世俗的天分が後者の男の着想の後を遠くからついてゆくという観念をあたえるのであった。」

そしてその後二人がサン＝タンドレ侯爵を殺して、帰途につくときの様子がつぎのように書かれています。

「アルゴウはまるで空嚙をけりとばしたほどに平静である。共犯者が彼の後についてゆく。そして彼らがこんな深夜のさなかにこうして歩いているのをみた人なら、彼らを『良心の呵責』をしたがえた『犯罪』に比したであろう。」と。

ここにはたんに二人一組の人物の叙述だけではなく、二人の人物あいだに主従の関係が、支配者と被支配者の関係が内包されているわけですが、このような人物把握は後の『人間喜劇』のなかでも生かされ、さらに強化されてさえ表現されている例がみられます。『暗黒事件』（1841年刊）のなかに次の言葉がみられます。

はじめの男（ペイラード）は自分で人の首を斬れたかも知れないが、第二の男（コランタン）は中傷と陰謀の網のなかに、無辜の民や女性の有徳の人をまきこんで、それらを溺れさせるか平然と毒殺することのできる人間であった。赤ら顔の男（ペイラード）はなにか嘲笑するようなことをいったりして犠牲者を慰めるであろうが、もう一人の方にはこりともしなかったろう。[……] 彼（コランタン）が事を考え、もう一方の男が実行するのであった。彼は思想であり、他方はその外形であった。」と。

『アルデーヌの助任司祭』の引用文中の「良心の呵責」は『暗黒事件』ではほとんど無感動なニヒリズムにまでいたっている感がありますが、このようなバルザックのニヒリズムへの志向は、1822年以前の著作では、『ステニー』のなかで、部分的に姿をみせているものでありました。したがって『暗黒事件』のなかの一文は、1822年の『助任司祭』という重要な一段階をへて結実したことになるわけです。

この作品のなかでもう一つ面白い事柄は22という数字がもっている種々の暗示的な意味あいでありま
す。ベルニー夫人は1777年5月23日生まれでした。バルザックはその22年後の1799年5月20日に生まれま
した。ところで『助任司祭』のジョゼフの年齢が当時のバルザックとほぼ同じ年齢の22歳と設定され、こ
れはロザン侯爵夫人が22年前に過失をおかしてジョゼフという私生児を生みおとしたということになる
わけですが、同時にこれは、実生活において実母の愛を感じとれなかったバルザックが、感情面での「実
の母」ベルニー夫人に自分を彼女の私生児として生ませたかった、そしてそのように設定したという、バ
ルザックの複雑な母性感情のあらわれではないでしょうか。もしそうだとすれば、バルザックはやはり実
人生のなかにみられる潜在力を重視する作家でもあったわけで、『アルデーヌの助任司祭』はバルザックが
この方向にもさらに一歩進みだしたことを意味しているであらう。

さて「青年時代の小説」第一作『ピラーグの跡取り娘』は暗黒小説、恐怖小説の影響下に生まれた作品
ですが、この暗い雰囲気はバルザックの作品のなかにいろいろ姿をかえて広がってゆき、先ほどの『暗黒
事件』という表題と内容にまでもおよんでゆきます。

次の『ジャン・ルイ』という作品は、秘密、毒殺、裏切り、復讐行為、死亡していたはずの人間の生存
といった意外性などの要素をもつこれまた波瀾にとんだ作品で、その意味で、暗黒小説の下地のうえに、
陽気、楽天的な雰囲気をともなって物語が展開する小説であり、フランス大革命という比較的近い過去の
大事件を挿話に盛り込んだ、現代小説に一步近づいた小説であります。

第三作の『クロチルド・ド・リュジニャン』は先にのべました献辞のほかに、ウォルター・スコットの
『ケニルワースの城』および『アイヴァンホー』の影響下に描かれた歴史小説的・騎士道風恋愛小説であ
りますが、これは「青年時代の小説」のなかでの最初の単独執筆作品であり、作中人物としては、社会に
おける矛盾と犯罪と人間の支配についてヴォートラン思想とマキアヴェリスムの思想の持主であるミッ
シェル＝ランジュという人物のほか、観念と生命の^{パン}の関係についてエネルギーの消費と保存の法則に立脚し
た独自の生命観を実践するトルース医師や、はじめて職業意識をもった人物としての料理人頭タイユバン
といった人物が登場する作品であります。

また第五作の『百歳の人』は老ベランゲルド＝スキュルダン二世という長寿思想の象徴的人物が登場す
る、超自然的傾向と帝政期の現実主義的側面とが融合し、やはりエネルギー観にもとづく生命思想が合体
した、後の『人間喜劇』の「哲学的研究」を予告している作品であります。

このようにして「青年時代の小説」九作品のうち半数以上がこの1822年に発表されたわけでありまし
て、1825年の途中まで断続して制作されつづけた「青年時代の小説」の執筆年月とその作品数を比較しま
すと1822年のもつ特異な大きな年の位置づけが可能なことがわかります。

しかもまだそれのみではありません。「青年時代の小説」の第八作とされています『ヴァン＝クロール』
(Wann-Chlore)でさえ、そのかなりの部分が1822年にすでに書かれ、1825年9月にいたって、匿名で、
ようやく発表された作品であることが今日ではわかっているのです。

このようにみてきますと1822年という年がバルザックの私生活と作家生活の双方において、まぎれもな
く重要な年であったことがわかるのでありますが、ここでもう一つ指摘しておきたいことは、バルザック
の全作品世界のなかで大きな特色をしめしている歴史と風俗と思想という主要な三傾向が、1822年の時点
ですでに出揃って顔出ししているということです。なるほど、たとえば宗教思想については、この段階で
は唯物論的世界観の影響下にあった宗教思想としてのべられており(『ステニー』のなかで)、共和主義的
な政治思想とともに、まだカトリック思想と君主制への共鳴の思想はあらわれてはおりません。しかし後
年バルザックが熱烈に支持することになるカトリック教の思想も、1822年およびそれ以前に表明されてき
た哲学思想の諸影響を完全に払拭できなかった、この事が忘れられてはならないと思います。

＜特別講演＞

かくてバルザックの生涯における1822年の意義を次のようにいうことができると考えます。

バルザックは世界文学という規模でみてもそれ自体巨大な山塊、あるいは一つの連山にも喩えられると思いますが、この連峰群を年代の観点からみますと、1822年はその最初の大きな峰、バルザック山脈の造山活動の最初の大きな成果であったことは間違いないと思う次第です。

以上です。御静聴ありがとうございました。

（この原稿は昭和62年5月16日京都大学楽友会館での京都大学フランス語学フランス文学研究会第三回総会の折に発表された講演原稿に若干の削除と加筆をほどこしたものです。）